

The Danube Quarterly

ドナウ通信



2006(平成18)年・夏季号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin



July							August							September						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
						1			1	2	3	4	5						1	2
2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9
9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16
16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23
23 ₃₀	24 ₃₁	25	26	27	28	29	27	28	29	30	31			24	25	26	27	28	29	30

目次

運動部情報

第一回釣行始末記

関本 正 1

リレー競技で活躍

盛田 常夫 3

日本、ハンガリー・テニス比較考

杉本 康志 6

ゴルフ四カ国対抗戦報告

石原 壮 8

随筆

掏摸（スリ）と尻（シリ）

盛田 常夫 9

私と国語教育

小関 真理 14

日本人学校

二年目を迎えて

三代 喜政 19

新任教員からの一言

佐藤明彦・兼子秀昭・篠崎篤史

19

児童作文

糟谷琉生・木村 航・石川由佳子・船山聖奈・恩田依以子

20

戸田莉紗・野際佳奈・堀川智生・八代大成

みどりの丘日本語補習校

運営委員会よりのご挨拶

鈴木 史明

25

一学期報告

中野明日香・宮城幸恵・フルディ満名実・知念まり

26

創作

第五話「もったいねえ」

岩井 孝博

29

運動部行事

ソフトボール大会報告

守谷 幸治

33

運動部情報

釣り部

第一回釣行始末記

関本 正

発足以来何の活動もしてこなかった釣り部ですが、六月一七日、一八日の週末、記念すべき第一回釣行を敢行致しました。拙文ですが、下記ご報告致します。

釣行計画立案プロセス

創部にまつわるエピソードより釣り部の会合場所と化した某日本料理店に釣り部部員が集まったのは五月末の某金曜夜の事でした。因みに、釣り部部員は釣り好きの奇特定の志願者、釣りをやった事があるという事で強引に勧誘(強制入部)された者、なんとなく飲み会(?)目当てで参加

した者と、粒よりです。

「まあ、釣り部として正式にアナウンスされちゃったし、何かしないとまずいですよねえ。取り敢えずイワナがバカバカ釣れるオーストリアの湖でもどうですか」

「それいいねえ、釣りの後はイワナの骨酒で一杯やろうか」

「女の子と一緒にいきたい人いないかなあ」

「最初は野郎だけでいいんじゃない？うーん、マンダムという感じで」

餃子をつまみ、ビールを飲みながら、真に訳の分からない会話をしつつ、釣行計画は立案され、六月に計画実行となりました。

いざ出陣

オーストリアの「爆釣(バクチョウ)の湖」で無垢なイワナをバシバシ釣るのが今回の計画です。片道最低五時間かかるのを考慮し、粒より部員それぞれの顔を思い浮かべ、釣行

前日の夜遊び禁止を厳に通達し、当日朝を迎えました。尚、部員のM氏は数日前に急遽都合がつかなくなり釣行メンバーは五人となっております。

当日は驚いた事に全員が七時三〇分集合場所N氏宅前に集合しました。前日の夜遊び禁止令を破った某氏もです。さすが粒より部員だけあり、やる時はやるものです。意気揚々と出発し、高速に乗りかけた時、

「Tさん、Kさん、因みにパスポートは持って来てますよね」

「あ、ああ、ヤベエー、忘れた」

夜遊びで睡眠時間の足りない某氏は、パスポートまで頭が回らなかったのです。やっぱり粒より部員だけあり、やる時はやってしまうのでした。某氏宅まで戻りほぼ朝九時再度出発、まあ国境でパスポートがないと騒ぐよりマシと気を取り直しB氏とN氏の運転する二台の車で飛ばし、予定より遅れはしましたが、三時に

現地に到着致しました。湖畔のペンションのすつかり馴染みの女将さんから日釣り券を購入、ボートを借りて湖に立ちます。そこには山紫水明の景色が広がっております。

「スゲーーきれいないいところじゃー」

さて釣果は

私以外の四人は全員フライ釣り未経験者ですので、まずはフライ釣りで独特のキャストイングを手ほどきします。頭数が多いのでおぎなりの指導になるのはやむを得ません。実戦で学んでもらいましょう。「リバー・ランズ・スルー・イトのブラピ、や」と唸っている人は放っておきます。私が手ずから巻いたシンプルですが釣れる毛鉤を「信念針」と称し皆のハリスに結びます。釣れない場合は信念が足りないのです。初心者四人は二艘のボートに分乗、私は陸からキャストイングです。

初日は六時までの三時間釣りをしました。陸から見ていると皆さんキャストイングに四苦八苦、とても釣れそうにありません。爆釣の湖なのに釣れなかったらどうしようか、と心配しつつ、かつ、まあ自分だけでも釣ればいいやと思いつつ、釣りをし、夕方棧橋で皆集合しました。

「イヤー、結構釣れたよ」

「毛鉤をトローリングするだけでもオッケーだったよね」

皆、勘定していなかったので正確な数は不明ですが、イワナ、虹鱒が結構上がったようです。尺上(30cm以上)も混じっています。この道二五年のベテランも真っ青です。ハンガリーで日々仕事をされている方々はどんな逆境でも成果を出す技に長けているもんだと改めて見直しました。某氏が使ったリール糸がグシャグシヤになったのを直すのに時間を取られましたが、道具を仕舞いホテルへ向かいます。その夜は、満席のホテル

ル・レストランで、周りの好奇の視線を浴びながら美味しい料理とイワナの骨酒で乾杯したのでした。

次の日曜日は朝から昼まで釣りをし、私が英国から取り寄せたばかりの玉網を夜遊びの某氏、K氏が湖底に沈めてしまうというハプニングがありました。それ以外は無事に釣りを終了しブダペストに帰った次第です。皆さんお疲れ様でした。

次回釣行計画

次回の釣行ですが、何を、どこで釣るのか、全く決まっております。このまま、ずるずると爆釣の湖という可能性もございます。

今回は是非女性に参加してもらいたいとの声が一部部員より出ております。粒より部員が揃ってまいります。心配される向きもあるかと思いますが、世の女性有志の参加を期待致しております。

ランニング部

リレー競技で活躍

盛田 常夫

1. リブレッセ女子ランニング大会
日本人会からは、日本人学校の五年生三名が、エキジビションのリレー競技（一・五km x 三人）に参加しました。

山下芽惟、小松愛、戸田莉紗の同級生チームは参加五〇チーム中、最年少チームで、スタート前にはアナウンサーが全員の名前を読み上げ、日本チームの参加を歓迎していました。

日頃から走り込んでいる第一走者の芽惟ちゃんが七分で走り、上位でバトンを繋ぎました。次の走者も八分ずつで走り、二三分を少し越える記録でゴールしました。大人に混じって、良く頑張りました。



出発前のポーズ。右から芽惟ちゃん、愛ちゃん、莉紗ちゃん

参加感想記 第一走者

私は、ハンガリーでのマラソン大会に出場するのは二回目です。

今回は、三人 x 一五〇〇メートルのリレーに参加しました。T・C O M レースのときにくらべて、女子だから、出場する人は少なかったです。

私は一番最初に走る事になりました。スタート地点にいらんだ時に、「日本人の女の子達も走ります」と言って、三人の名前をしようかいていたので、びっくりしました。

いよいよスタートしました。みんなは速く走っていたけど、自分のペースで走りました。

一五〇〇メートルはあっという間で、小松さんに無事バトンを渡す事が出来ました（芽惟）。

第二走者

私にとっては初めてのリレーマラ

ソンでした。

走る前はとてもドキドキしていましたが、バトンを受け取ってからは、ただ一生けん命に走りました。

こうして三人一組で走ることは、日本にいたらできなかったと思います。こんな体験ができてとても嬉し
いです。少しだけ自信もつきました。
もし、また走る機会があったら走
ってみたいです（愛）。

第三走者

私がハアハア言いながら走っているのに、ポプラは楽しそうに飛び回っていた。

とうとうやってきた。バトンを受け取った。

走り出した後の気持ちのいい時間は、400mも走らないうちに、少しの後悔を私に運んできた。

しやくにさわるポプラ。私をじゃましないでよ・・・。前の人もう少しゆっくり走ってよ。



K&Hマラソンリレーのスタート風景

少しポプラが気持ちよくなってきた。木立の中にゴールが見えた。私の足が、ポプラの気持ちごとく、とても楽しかった。

私が最後のランナーだった（莉紗）。

2・K&Hマラソンリレー大会

六月四日、恒例のマラソンリレー大会が開かれました。日本人会からの参加は四回目になります。

今年も前年同様、男子フルマラソン2チーム、女子ハーフマラソン2チームの計4チームで参加しました。天候の安定しない季節でしたが、幸いにも雨に降られず、全員、7kmを無事完走しました。

レース結果は以下の通りです。

日ー洪友好A（チーム盛田・茂木）

男子一般第一四位（三六五チーム中）

記録 二時間五十一分二秒

日ー洪友好B（チーム菅野・村上）

男子一般第二二七位

記録 三時間三十九分六秒

日ー洪友好C（チーム浅野）

女子ハーフ一二位（四三チーム中）

記録 一時間四十九分五七秒

日ー洪友好D（チーム木村）

女子ハーフ三六位

記録 二時間一〇分二五秒

3・ゲーターレード記録会

六月一日に、五kmと一〇kmの記録会が開かれました。ただし、一〇kmはチップ計測ですが、五kmは自己計測でした。

コースはペスト側のドナウ河沿岸道路を使い、ヘリアホテル裏から出発して自由橋を往復するのが一〇km、国会裏までの距離を往復するのが五kmです。

今年は男子のレベルが上がり、一〇km四〇分を切っても五〇位以内に入ることができませんでした。他方、女子の一〇kmレースの参加者は三九一名でしたが、レベルは低く、盛田の記録は女子の三位に該当。

男子一〇km（チップ計測）

盛田 常夫	八〇位（五八九名中）
記録	四一分一四秒
村上 唯	二〇三位
記録	四五分三八秒

五km（自己測定）

浅野 未希	記録	二四分五〇秒
山下 芽惟	記録	二五分三〇秒
盛田 恒平	記録	二六分〇〇秒

一〇kmレースのスタート



今年から導入された新種目。ローラースケートの九km競走のスタート風景。

テニス部

日本、ハンガリー・テニス比較考

土曜日テニス幹事 杉本康志

ハンガリーでテニスを始めてはや6年。技術を向上させるヒントがなにかと試合の合間に隣のコートに目を向ける。すると同じテニスでもハンガリー人と日本人では大きな違いがあることに気づく

ミスショット

テニスとはポイントを取り合うゲーム。だから取った方は喜び、取られた方は残念がる。日本人の場合、ちよつと違う。取れたとしても本人の意図と違った時は返って落ち込む。絶対球が来たのでここぞとばかりにラケットを思いっきり振る。しかしボールはスイートスポットに当たらず、ネットをかるうじて越え、相

手コートに落ちる。強い打球を予測し、ベースラインで踏ん張っていた相手は追いつかない事を悟り、下を向く。結果だけ見ると状況を踏まえたナイスドロップショット。だがただ単に飛ばなかっただけ。首を傾げながら腑に落ちない顔でサービスマインに歩く。(ダブルスのパートナーに)「ナイス(ドロップ)ショット」と言われると余計気持ちは落ち込んでしまう。取った方も取られた方も下を向いている。日本人は結果だけでなく内容も大切にしている。このような姿のハンガリー人を見たことはない。「結果オーライ。何か問題でも？」

フォーム

日本人は基本に忠実であろうと改造に努める。それに対しハンガリー人にその意識は希薄。個性を伸ばそうという考え方なのか。しかしテニス界のトッププレーヤーに日本人は見かけない。なんでだろう。

ドロップショット

ハンガリー人はこれが大好き。ただし、ボールに回転を掛けるわけでもなく、ただ短く打っただけ。年配者はベースラインに張り付いてあまり前に出てこない。そのため上半身が重く、足が細い年配プレーヤーには確かに効果的。これを「おやじ殺し」と呼ぶ人もいるけど、やって見てなるほどと思った。

ハンガリー人グループとテニスをして一度、これをやられた事があった。こいつだったら届かないと思われたのだろう。相手のプライドを傷つけるから逆効果と思うのは小生だけだろうか。日本人でこれを頻繁に使う人をあまり見かけない。

テニスをする日

日本人は週末、ハンガリー人は平日。料金表を見るとその傾向が一目瞭然。平日における出勤前の時間と退社後の時間帯はコート代が高い。

会議や残業をしないのと日本人は考える。ハンガリー人は週末に家族サービスはしないとハンガリー人に聞き返され、耳が痛い。どっちもどっち。

シングルス、ダブルス

ハンガリー人はシングルスが好き。ミスしても責任を転化できないし、個人主義の国では気苦労なくエンジョイできる。日本人は対照的にダブルス。ペア同士のコミュニケーションも楽しみの1つ。知らない人や高慢な人とペアを組み、気を遣ってしまいうこともあります。しかし一度気心が知れてしまうと相乗効果で1+1が3にも4にもなってしまう。弱者が強者に勝つ。そこが面白いところです。

判定

ハンガリー人はよくもめる。家族4人でプレーしているのを見た事が

ある。ボールがラインの内側に入ってた、入っていなかったと怒号の応酬。ハンガリー語のわからない駐在員の方々もすぐ異変に気づくほど。日本人とプレーしてこのようなことは体験していない。「文句を言わせないぐらいのショットを打たなかった自分が悪い！」と反省してしまうのは日本人くらいかな。

悔しがり方、褒め方

ハンガリー語の罵詈雑言の語彙が世界一多いと自負するだけあって、たくさん出てきます。でも基本的に判定を除いて自分自身の不甲斐無さにあつて相手やペアにはないです。日本人はあまり感情を表に出さないですね。むしろよく褒める。失敗が多くて成功が少ない小生は褒めて育ててもらっています。但し、ペアが配偶者や親子だったりする時は別。ミスしても温かくフォローしてくれた人が、近親者には「口撃」の

嵐。厳しい言葉は愛情の裏返しだと思いますが、周囲のメンバーはちょっと引いてしまいます。

どっちが上手？

こうやって羅列しますとハンガリー人が無礼で下手な様に聞こえてしまいましたが、試合巧者です。タイミングを外す変則サーブ。予想外のスーパースhots。セオリーを無視して一定でないリターンは予測不可能。負けてしまうことも多々ありました。このような様々な人と試合をしたリ、ペアを組むのは勉強になります。そしてなによりも自分のプレーについて考える機会を与えてくれます。土曜日テニスクラブは会社や国の枠を超えて多くの人たちとテニスを通じて交流しています。参加者を募集しています。このクラブの卒業生のように上手になって日本に凱旋して下さい。

ゴルフ部

四カ国対抗戦報告

石原 壮

去る六月一日、ハンガリー Pannonia ゴルフクラブにて、第二回中東欧四ヶ国対抗 JetroCup ゴルフ大会が開催されました。今大会をハンガリーで開催するに至る経緯は紙面の都合上割愛させて頂きますが、前回大会の三位という結果を踏まえ、地元 Pannonia ゴルフクラブ開催ということで必勝を期して臨みました。参加人数は、チェコ・スロバキア・オーストリアそれぞれ各六名に対し、ハンガリーからは一七名という参加人数となり、ハンガリープレーヤー各位の勝利に対する執念が感じられました(実際には、公平性確保の為、ハンガリーチームは二分割での参加となりました。)

一方、チェコ・スロバキア・オース

トリアからも、多くの方が前日にハンガリー入りして同コースの下見練習をされるなど、各国とも、今回大会に対する意気込みは並々ならぬものがありました。

さて、肝心の大会結果ですが、以下の通りでした。

- 1位 ハンガリー(BUDA)
- 2位 チェコ
- 3位 ハンガリー(PEST)
- 4位 オーストリア
- 5位 スロバキア

ホームの利もあり、念願のハンガリーチーム優勝という結果を収めることができました。次回大会はまたアウエーでの開催となりますが、一層修練を重ね、東西統一ハンガリーチームにて、再び優勝を目指しましょう。

賞品ご提供頂いた企業の皆様、遠路お越し頂き大会運営にサポート頂きました日本航空の皆様、この場をお借りし御礼申し上げます。



随想

尻（シリ）と拘摸（スリ）

―『コルナイ自伝』翻訳余話

盛田 常夫

経済学者と伝記

ハンガリーの経済学者『コルナイ・ヤーノシュ自伝』(Kornai János, *Gondolat erejével*, Osiris, 2005)を翻訳した。経済学者の伝記など面白くもないと考える人も多いだろう。二〇〇二年のアカデミー賞を受賞した「ビューティフル・マインド」は、ノイマンが開発したゲーム理論への理論的貢献でノーベル経済学賞を受賞した数理経済学者ナッシュを描いたものだ。大学院時代に執筆された論文がノーベル賞受賞対象になったのだが、ナッシュは数学者としての

名声を獲得する前に精神分裂病を発症し、長い闘病生活を送っていた。ノイマン（とモルゲンシュテルンとの共著）の「ゲーム理論」出版五〇周年になる一九九四年に、ノーベル経済学賞選考委員会は戦後のゲーム理論の発展に貢献した学者を受賞対象にすることを決め、委員会は病状の安定を確認した上で、ナッシュをその一人に選んだ。この劇的な展開がノンフィクション（シルヴィア・ナサー『ビューティフル・マインド』二〇〇二年、新潮社）で描かれ、映画化された。

アカデミー賞を受賞するような映画になることもあるのだから、経済学者の伝記も捨てたものではない。もともと、ナッシュの実像はスクリーンダラスな部分が多く、題名のようにビューティフルではないどころか、アグリーなのだ。サスペンス調に映画化された銀幕のナッシュは虚像。現実からはかなり遠い。ビューティ

フルなのはナッシュのような奇人を介護したり、大学の籍を守ったりしてナッシュを支援してきた人々である。映画のほとんどがフィクションである。

それに比べると、『コルナイ・ヤーノシュ自伝』のテーマはもつと歴史的に重い。一九四〇年代から社会主義の崩壊までハンガリーの中に生きてきた知識人の記録だ。ユダヤ人として生まれたコルナイ家の生活が、ナチスドイツのハンガリー進駐によって、根底から崩れる様子が詳しく描かれている。逃亡生活を終えた少年コルナイが、戦後の社会主義政府の樹立に伴って、ハンガリーの解放勢力である共産党の機関紙記者になるのは自然なことであった。しかし、共産党の専制政治とハンガリー動乱を契機に、再び彼の人生が変わっていく。何度も亡命するチャンスはあったが、ハンガリーに残る決断は揺るがなかった。現代を生き抜いてき

た知識人の生き様は、ハンガリーの戦後社会の具体的なイメージを膨らませてくれる。

社会主義経済の現実を分析する者にとって、亡命はその現実的な土台の喪失となる。これがコルナイの本能的な直感だった。大著『反均衡の理論』（一九七一年）と『不足の経済学』（一九八〇年）で国際的に評価されたコルナイは、最終的に、一九八六年にハーヴァード大学の招聘を受け入れる。しかし、これは亡命ではなかった。大学の度重なる定住要請にもかかわらず、ハンガリーとの半年ごとの交互勤務という特例を条件にしたものだった。

こうしてコルナイは社会主義経済研究の第一人者という名声を得て、彼の著作は一九八〇年代のこの分野の研究において最大の知的関心を呼び起こした。専門研究論文における引用頻度で言えば、マルクスやレーニンを凌いで、コルナイがこの時代

のスターだった。ロシアや東欧、中国における体制の思想的な革新へ大きな影響を与えた経済学者である。

翻訳の質を決めるもの

翻訳の良否を決める要因にはいくつかある。一つは、翻訳語の能力である。ハンガリー語から日本語への翻訳について言えば、日本語能力が決定的な重要性をもつ。もちろん、逆は逆である。ここが通訳と違う点で、話し言葉にはかなりの曖昧さが許されるのにたいし、書き言葉には曖昧さや不明瞭さは許されない。言語の習得において一番難しいのは書き言葉である。日本人であっても、味のある日本語文章を書くのはたいへん難しい。だから、どんなに通訳能力のある外国人でも、母語でない外国語への翻訳は不可能である。これまでの経験から言えば、日本語への翻訳の質を決める要因の少なくとも半分は、日本語の文章力で決まる。

第二の要因は、翻訳内容の専門知識である。二〇〇一年出版の邦訳書『異星人伝説』の翻訳では専門分野が違ってから苦労した。物理学、化学、数学の専門内容や用語の正確な翻訳のために、それぞれの分野の教科書を読んだり、物理数学辞典を調べたりすることに時間がとられた。自然科学分野の研究者が翻訳すれば、もっと楽に訳せただろう。しかし、多くの自然科学研究者は長い文章を書く必要性や習慣がないから文章がうまくない。文章がうまくないと、読める文章が綴れない。

それはともかく、翻訳作業において専門分野の知識は三〇四割の位置を占めるだろう。理論的な内容は思案するまでもなく、簡単に理解できる。今回の『コルナイ・ヤーノシュ自伝』は、これまで出版された自らの著作の批判的な省察に内容の三分の一ほど当たっているから、コルナイの理論を知っていると知らないのでは

は翻訳の正確さもスピードも違ってくる。

第三の要因は原語の語学力である。今回のケースで言えば、ハンガリー語の能力である。文学書の翻訳の場合には原語能力のウエイトは五割以上を占めるだろうが、専門書の翻訳の場合には高々一、二割程度だろう。専門知識で理解できる部分が大きいから、原語能力のウエイトはそれほど高くないのだ。

外国語表記の問題

著名な経済学者の多くはアメリカで活躍している。とすると、ドイツ人やフランス人の経済学者の人名を母語の発声で表記するのか、それとも英語の発声で表記するのかという問題が出てくる。経済学の世界では英語読みにするのが一般的だが、たとえば物理学者のアルベルト・アインシュタインはアメリカ滞在が長いから、英語読みでアルバート・アイ

ンシュタインとなるところだが、敬意を表してドイツ語読みで呼ばれていた。だから、何人かの経済学者について、実際にどう呼称されているのかを確認したり、インターネットで多数派の表記を確認したりしなければならぬ。これは結構面倒な仕事だ。

これとは別の日本語表記の問題がある。『異星人伝説』の翻訳に際しては、物理学者の Szilárd Leo を「ス イラード」と表記するのことに拘った。日本ではふつう「シラード」として表記されている。この原則を採用すると、多くの日本語人名表記で「シ」と「ス」を明確に区別することが必要になる。たとえば、ハンガリー国会議長の Szili Katalin を「尻カタリン」と表記しては失礼で、「スイリ・カタリン」と表記・発声すべきである。同じことは、Szilvester も「尻ベスター」ではなく、「スイルヴェスター」である。ナッシュの伝記の著

者 (Sylvia Nasar) も、シルヴィアではなく、スイルヴィアと表記すべきだろう。

R と L のように、日本語発声で区別されない音は区別して書きようがない。しかし、「ス」と「シ」は日本語でも明瞭に区別される音である。記において、これを区別することなく、「ス」を「シ」と表記することが一般的になっている。これは明らかに発声に無頓着だった昔の「なまくら」表記をそのまま踏襲しているからに他ならない。もっとも、方言によっては「ス」が「シ」になまったり、その逆が見られたりして、日本語では「シ」と「ス」が曖昧に相互移行する音になっている。しかし、「掏摸 (スリ)」と「尻 (シリ)」の意味が違いうように、「ス」と「シ」の発声を間違えると、外国語では意味が通じなくなる。

たとえば、I see sea を「アイ・シ

ー・シー」と発声すれば、*I she she* としか聞こえないから、意味は通じない。だから、「アイ・スイー・スイー」と表記した方が良い。*Silicon* は「シリコン」であって、「尻コン」ではない。*Simulation* もふつうの日本語表記では「シミュレーション」(*simulēiʃən*)と書かれるが、原音は[ʃi]ではなく[ei]だから「スイミューション」と発音しないと、すぐには理解されないだろう。テレビなどは和製英語化したものだと思えるが、微妙なものもある。*Dilemma* はどう発音しても「痔レンマ」とはならないが、「ジレンマ」はもう定着している。だが、「ディレンマ」と発声しないと、まず理解されない。また、*discipline* も「弟子プリン」と表記する場合が多いが、これも「デイス(イ)プリン」と発声しないと理解されないだろう。

濁音の場合も同じだが、日本語では「ズ」(頭)と「ジ」(痔)の発声

はさらに曖昧になり、ほとんど区別されないから問題は深刻だが、幸いにして、清音に比べて事例が少ない。これもふつうの日本語表記では、「ジ」に統一される。しかし、印欧語の発声では明確に区別される音だから、「ス」と「シ」と同じように区別して表記するのが望ましい。そうしないと、外国では通じない。たとえば、ドイツの神学者の *Süßmilch* を「ジュース(ミルヒ)」と表記すれば *juice-[dʒu:s]* になるが、原音は *zys[zu:s]* だから「ズウース(ミルヒ)」と表記するのが正確である。

蒸留酒の *gin* は「ジン(dʒin)」が良いが、ドイツ語の *Zinn* は「ツイン(tsin)」であって、けっして「痔ン」ではない。工学者の *Zworikin* は「ツヴオリキン」であって、「痔ボリキン」ではない。ちなみに、サッカー日本代表監督 *Zico* は「痔ーコ」でなく、「頭イーコ」あるいは「頭イッコ」だろう。ちなみに、グーグル

検索で見ると、正しい表記(ズイーコ)をとっているサイトが三三三件なのに対して、誤った表記(ジーコ)はその千倍もある。ちなみに、次期監督も「イヴィツァ・オスィム」で、「揖斐茶・惜しむ」ではない。

外人から自分の名前を変に発音されたら気分が悪い。そのことを考えれば、もつと発音や表記に気を配るべきだ。蛇足だが、以前にNHKのモスクワ特派員が「エリチン」大統領を連発していた。「イエルトシン」と発声しないと言語教養が疑われるだろう。もつとも、朝日新聞でも、わざわざユシェンコを原語発声に近い長音発声のユーシェンコを採用したと断っておきながら、ティモシェンコをチモシェンコなどと平気で表記しているから、日本人の聴力が疑われても仕方がないだろう。

対象とする読者

『異星人伝説』は一般読者向けに

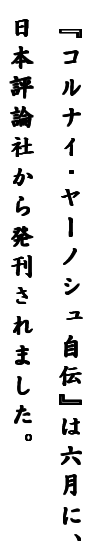
ハンガリー現代史、東欧史、社会主義史、社会主義經濟、現代經濟学、社会科学の創造論、科学史等を専攻している、あるいは専攻しようとする研究者や知識人を読者として想定している。とくに、現代經濟学を専攻する者は社会科学における理論創造の営みを直に知ることができよう。その意味で、これは經濟学を事例にした、科学創造論でもある。

動向をみると見通しはそれほど明るくない。だが、ハンガリーの現存学者の中で、ノーベル賞に一番近い存在であることも事実である。

最後に、日本の学術出版の状況について、少しだけ記しておきたい。

我々の学生時代までは、学生は本を買って勉強するというのが常識だった。ここ三〇年の間に有象無象の出版社・出版物が氾濫し、かつＰＣゲームが普及する段になって、学生は難しい本を読まなくなったし、買わなくなつた。ＰＣゲームに一万円出してても惜しくないが、頭を使う難しい本は読まないから、三千円でも高いのだ。売れている書籍は皆、ポイ捨てされるような質のものか、映画で話題になつたものだ。まず硬派な書籍は売れない。読む学生がいなく

今回の出版も初めから、大赤字前提の仕事である。世の中、景気の良い話が飛び交っているが、日本の学術出版は危機的な状況にある。それは日本社会全体の知的水準の荒廃を意味する。



私と国語教育

―ペンだこは名誉の負傷

小関 真理

パソコンが主流になった今日この頃、「ペンだこ」という言葉は殆ど死語になりつつあるのではないでしようか。しかし幼い頃をニューヨークで過ごした私にとって、右手中指にできたペンだこのおかげで今の自分があるように思え、この言葉がとも気に入っています。

ニューヨークへ

私が母とニューヨークに渡ったのは一九七二年四月、三歳半の時です。父は既にその二年程前に渡米して、我々が合流した時には現地で真珠などを扱う貿易会社に務めていました。アパートは市内のブルックリン区南部、当時は主にユダヤ系とイタリア系のアメリカ人が多く住んでいた地

区でした。日本人は周囲には全くいなく、他のアジア人もぼつぼつ見かける程度という環境で約十年、一九八一年夏に帰国するまでここで過ごしました。日本人ではあるものの駐在員ではなかった父、いつ帰国するか目処も無く、母も「一年程度」「来年こそは」と思っているうちに月日が流れたのでしよう。経済的な事情もあり、その間に日本に帰国したのは一度だけ、十歳の時の夏休みに数週間滞在しました。

そういう環境で育ったので、当初日本人とは、日本文化とは、ときちんと説明出来るほどの経験や知識があるわけでもなく、ただ外見がアジア人。「中国人？」と聞かれると「いえ、日本人です」と、それがどういう意味を持つのかも良く分からないまま答えていた自分がそこにありました。唯一、その言葉によって日本人がアメリカ人とは違うと思えたのかも知れません。

ニューヨーク滞在の間、家では常に両親、それに後に現地で生まれた五つ半年の離れた弟とは日本語を話していました。本来内向的な性格でもあり、他人とはよく喋る子ではなかったとは思いますが、記憶では母が近所の公園や図書館に連日連れ出し、アメリカ人や英語の本に触れる機会を作っていました。テレビもそれなりにみたと思います。ちようど言葉を吸収できる年齢でもあり、英語を意識的に「学んだ」という感覚はありませんでした。



渡米して約半年後、四歳になって保育園に通い始めました。これは Yeshiva というユダヤ人の子供が通う施設で、普通の遊びの中でもユダヤ人の童謡や祝日を祝う行事などを教えていました。ちょうど近所で仲良くなった親子の多くがユダヤ人でこの保育園に子供を入れるということからこうなったのだと思います。驚くことに、今でもその時に習った歌の節を覚えています。

翌春には週一回、日系人が中心に運営しているキリスト教会の日曜学校に行き始めました。これは親が私に日本語にもっと触れる機会を与えようと考えたからのようですが、週一回だけだったせいかな不思議なことにここで過ごした日々の記憶は殆どありません。親の思いは子には通じないという典型的な例かもしれせん・・・。

この頃には既に図書館通いが定期化して、英語の本を読むのが大好き

だったようです。実際、五歳になった秋に現地の公立幼稚園に入園しましたが、二週間ほどして「英語の理解は良い」ということで一年生に編入しました。結果として今という飛び級をしたことになり、大きい同級生に囲まれ体力的には差があったところもありましたが、勉強についていけないということは感じませんでした。むしろ、英語の本でどんどん日本の習慣や文化を知る、学校で習うこと以外の知識を得る、という感じでした。(アメリカの公立幼稚園は、たいてい普通小学校と校舎が同じで、付属という感覚が強い)

その一方、平仮名は読めるようにはなっていたものの、いつしか日曜学校には行かなくなり(ここにいた日本人は殆どが永住者、もしくは国際結婚した方でしたので、英語もかなり使われていたようです)日本語の方は親に言わせると「かなり怪しい」ものになってしまったようです。

いずれは帰国するつもりでいたゆえ、そんな私の将来を相当心配したと思います。広い歩道に慣れた私が、日本で道路の渡り方を分らないと大変ということでは子供の頃は道を渡る時に右手を上げるように教えられた位ですから。あの時の私の姿を見た運転手達は何を思っていたでしょうね。

母と一緒に書いたあいいうえお

冒頭のペンだこ、実はこの頃の「名誉の負傷」です。親から平仮名・カタカナのドリルのような本が与えられ、鉛筆で点線をなぞるのですが、なにせ自分にしてみればぐにやぐにやした線以外の何でもありません。「何のため」という切羽詰った感じも無く、絵を書く感覚だったと思うのですが、そこで母が強烈な握力で私の手に自分の手を被せ、一緒に一つ一つの字を書いていったのです。そんなことを何度も繰り返すうちに

そのペンだこは現れたのです。当時は自分にしてみたら拷問のような時間でしたが、それがなければ日本語をきちっと習得することはなかったと思います。また、この間に日本語の本にも触れたのは大きかったと思います。

結局小学一年生の分の漢字まで家で親に教わりましたが、弟が生まれたこともあり、二年生から週一回、日本語補習校に通い始めました。一九七〇年代中頃のニューヨークはそれなりに日本人がいましたが、その分布は明確に分かれていました。駐在員の家族は大抵市の郊外でいずれ日本に帰国するという前提での生活を営み、他方市内には多くの永住予定の人々が住んでいて、小学校レベルの補習校も確か合計七校、市内と郊外にありました。私達の住む地区には学校が設立されるほど日本人もいなかったもので地下鉄で一時間以上かけてある学校通いましたが、ここ

は永住する家庭の子供が多く一学年二クラスありましたが、休み時間に遊ぶ時は殆ど英語で喋るような環境でした。

母は教育熱心、というより何事にも熱心な人で、補習校から帰宅すると大体その日のうちに出された宿題をしました。翌週の予習もさせられて、母の走り書きが国語の教科書の行間にあつたこともあつたのですが、それを次の週先生に「教科書に落書きはしないように」と私が叱られたのは未だに我が家では逸話として残っています。

結局途中一年ほど休みましたが、補習校には六年生を卒業するまで通いました。特に最初の頃は週一回日本人の友達に会いに行くという気持ちの方が強く、日本語を学ぶことが如何に自分の将来にとって大切かは考えていなかったように思います。親からして見れば自分達の思いや苦労も知らず、全く目的意識の無い子

供だったに違いありません。

この間現地校の方は小学校を卒業すると区全体から試験を経て入学できる中学校に進学し、そこでは三年分の学習を二年で終えるコースを選択し一九八一年六月、十二歳で卒業しました。親はそのタイミングでの帰国を決意していましたが、高校入試に合格までしていた自分としては日本に帰るというのは正直気の重いことでした。家で普通に会話が出来るとは言え日本語が得意では決まらず、英語での生活の方が楽であったし、勉強も英語の方が自信があったのは事実です。恐ろしいことに、渡米した頃「いつ日本に帰るの？」と毎日のように母に訊ねていた女の子の姿はもうどこにもありませんでした。



ノートを書き写した日々

実際、帰国すると親戚が私の話す日本語の発音が余りに「英語訛り」が強く、注意して良く聞かないと何を言っているか分からないとしばしばこぼしていました。生まれた年の関係で帰国後は中学校一年の二期からスタートしましたが、帰国子女のある国立の学校に編入しました。三学期を終えるまでの半年は帰国子女のみ、十四人のクラスでした。通常は各国から帰国する生徒がいるので皆日本語を使わざるを得ない環境になるようですが、私の編入した年は私を含め十三名が英語圏からの帰国子女で、ここでも休み時間は英語が飛び交っていました。

やはり帰国当初は授業を理解するのが難しく、特に先生が板書するものをノートに書き写すスピードが遅く、それに集中していると先生がしゃべった言葉を聞き逃す始末。教わっている事の内容を理解していない

のではなく、それが日本語で説明されているところが厳しかったのだと思います。とにかく最初のうちはすべてを写して、家に帰ってそれをそっくりそのまま別のノートに書き写しました。そうです、ここでも私の指にはペンだこ・・・。その繰り返しで徐々に「日本語を書く」という作業に慣れ、字も判読できるものになり授業を聞く余裕も生まれました。幼い頃から活字嫌いではなかったのも幸いして、読書は新しい漢字さえ覚えれば問題は余りなかったと思います。その学校は帰国子女学級は一年生だけで、二年生以降は一般の生徒と一緒にでした。高校、大学は通常の入試を受けました。

二つの言語と共に

三十七年の自分の人生を振り返りますと、幼少時代の教育は英語・日本語どちらも常に受身でした。親、特に母親の思いを知らず知らず背負



い、ただ与えられた場面・課題を何とかこなしていたように思います。英語は自然体で、日本語は「どうして？」と不思議に思いながらも吸収していきました。それが小学校高学年（五、六年生頃でしょうか、一時帰国した後だったのは確かです）になると自分が日本人であるというアイデンティティーが芽生え（その基本情報の多くが英語の本から入手したものでしたが・・・）、ある程度の読み書きはできないと、と自分で感じるようになったのだと思います。周

囲も「彼女は日本人」という目で見ますし、これはどう転んでも否定できるものではありません。これで猛烈に勉強することは決してありませんでしたが、漠然と文字を目で追うのではなく、日本語を習う一つの目的・理由が分かったように思えました。

その後家族は二度と日本を離れることはありませんでしたので、帰国当初八割以上だった私の人生の「外国生活比率」もいつしか三割以下になりました。アメリカにいた時は「日本人だから出来ない」と言われたくなかったし、帰国後は「アメリカに長く住んでいたから出来ない」と言われるのも嫌でした。この意地っ張りなところがどれだけ影響しているのか分かりませんが、一つ自分が恵まれていたと思うのは、渡米した時も、帰国した時もまだ言語を吸収できる年齢だったということです。幼いときから本が好きだったことも、

結果として帰国してからも洋書を読み続け、年齢相応の英語の語彙を維持するのに役立ったと思います。

子供の教育、特に語学教育は、ある部分親の意地とエゴが必要なのかもしれませんが、自分の経験からしてこれは明らかにその子にとって一つの財産になります。世界がグローバル化していく中、人々はお金を払ってでも外国語を習得しようとしているわけで、それをもっと自然な形で身につける機会があるのでしたら、それは有効に使って良いと思います。自分の親が、当時限りのあった時間・エネルギー・お金を使って出来るだけバランス良く二つの言語を私に習得させようとしたことには本当に感謝しています。なんとと言っても指のペンだこはもうとつくになくなってしまっても、学んだ言葉は残っているわけですから。



編集部からのコメント

小関さんのエッセイは、「緑の丘」補習校便り第四号（二〇〇六年）から転載させていただきました。帰国子女の記録として、皆さんの参考になると思います。

小関さんは一九六八年生まれ。七年より一〇年間ニューヨーク滞在。日本へ帰国後、普通枠で高校、大学を受験し、九一年英字新聞社ジャパタイムズ入社。現在同社報道部長。当地に在住されている鷺尾亜子さんの元同僚で友人です。

日本人学校

二年目を迎えて

日本人学校校長 三代 喜政

六月に入り、寒さが突然真夏の暑さになったブダペスト。子どもたちも教室では汗を拭き拭き授業を受けています。日差しが強いのに、休憩時間には先を競って外に飛び出し遊んでいます。本当に元気な子どもたちです。

今年は二年目を迎え、新しい取り組みにも挑んでいます。小学部の日、中学部の日を設けそれぞれが独自の活動を展開します。また、低学年にも英会話に親しむ時間を設け、楽しい英会話活動を繰り広げています。「打てば響く学校」を作るために、今日も精一杯ブダペスト日本人学校の教育に取り組んでいます。ご支援・ご指導よろしく願います。

赴任して三ヶ月

佐藤 明彦

埼玉県より派遣されました佐藤明彦と申します。私にとってブダペストはまったく未知の場所でした。しかし、赴任して約三ヶ月。治安の良さに加えて、綺麗な街並みや美味しい食事、良質な音楽等々・・・。今ではこの街が大好きです。この素晴らしい街に住み仕事できるのは無上の喜び。精一杯任務に励みます。よろしく願います。

思いを新たに

兼子 秀昭

静岡県から派遣されました兼子秀昭です。学校の研修にて日本人会会長の伊藤様の講話を聞くことができました。日本人学校の設立に多くの方が関わり、ハンガリーに住む日本人の方々の思いがたくさん込められている学校に勤めていることを改めて

て感じました。なぜか「もったいない」という言葉が頭に浮かびました。

保護者の方と話をする機会がありました。みなさんこの日本人学校を大切に思い、学校に期待を寄せていただいていることがわかりました。こうした学校に関われることを幸せに思いながら、丁寧に教育を進めていきたいと感じています。

尽くす

篠崎 篤史

ハンガリーに赴任し早三ヶ月、歴史と自然が調和したこの地に来ることができ大変幸せな気持ちです。「ああ、我がブダペスト日本人学校」：校歌の一節であるそのフレーズを常に忘れることなく、ブダペスト日本人学校の一員として純粋な子どもたちのために一生懸命尽くしていきたいと思っています。これからどうぞよろしく願います。

児童作文

ミニうんどうかい

小学2年生 糟谷琉生

わたしは、あさバスにのるついでに前まわしとびのれんしゅうをしました。いちばんさいしよに四十かいとべました。つぎに、二十かいとびました。ちよつと前とんだかい数よりあとでとんだかい数のほうがすくなかったので、くやしかったです。しかも、おかあさんが、おとうさんに、「さいしよは、四十かいとんだよ。つぎは二十かいしかとべなかったよ。」と話したので、ものすごくくやしかったです。

ミニうんどうかいで一ばんさいしよに三年生のおわかれかいをしました。一ばんさいしよのきょうぎは、ボールおくりです。まけちやったけど楽しかったです。

二ばんめは、ジャンケンれっしやです。わたしは、「どうせ、一かいかっただけでおわるんだ。」と思いました。思ったとおり、一かいかっただけでつぎはまけてしまいました。

三ばんめは、しつぽとりおにです。さいしよは、ぜんぜんねらわれなかったけど、そのうち三年生にとられてしまいました。

四ばんめは玉入れです。一かいせんは、まけました。二かいせんはかちました。ものすごく楽しかったです。そのつぎにわたしは、だいひょうでなわとびれんぞくきょうそうをしました。一かいせんは、わたしは、げんかいになりました。二かいせんは、わたしは、さいごから二ばんにのこりました。

六ばんはリレーです。一かいせんは、かちました。二かいせんは、まけてしまいました。さいごは、つなひきです。一かいせんは、かちまし

た。二かいせんは、わすれました。さいごは、へいかいしきです、ざんねんながらあかしろ、ひきわけでした。ちよつとくやしかったです。

農業博物館に行つて

小学3年生 木村 航

バスで農業博物館に行きました。さいしよに人間のほねや犬のキバとかがありました。おくに行くとテントがありました。

テントの中を見ると、ぶきとふくがいっぱいありました。地面には、犬のはくせいやキバがありました。びっくりです。さいしよの所にもどると、上にシカの顔のはくせいがありました。ぼくははくせいをみて、こう言いました。

「はくせいが多いんだなーここは。」次にそこから左に行ってみるとむ

かしのハンガリーの地図がありました。ぼくはこう言いました。

「でけーな。」

おくへすすむとジャングルのような道へ入りました。きつねやリスがいっぱいいました。農業博物館はもしかろいなあと思いました。

晴れてよかった校外学習

小学四年生 石川 由佳子

六月十五日、金曜日に校外学習がありました。私たち四年生は三年生と合同で、農業博物館と動物園に行つて来ました。この日はとてもよく晴れて、雲一つありません。農業博物館は昔の人が住んでいた家の様子や、恐竜や動物の骨がおいでありました。

昔のハンガリーの家は、木や石や布でできていました。よく見ると赤

ちゃんを乗せたゆりかごがつるしてあります。また、今の家とはとても大きな違いがあります。それは家はすべて石や木でできているからです。昔のハンガリーの様子を見るのはおもしろかったです。

他にもいろいろな機械がおいでありました。たくさん種類の鳥の卵もおいでありました。

歩いて動物園に移動しました。暑さをだんだん感じてきました。まずプレーリードッグをみました。初めて見ましたがかわいかったです。

やぎの作の中に入りやぎに触れるというコーナーがあつたので、中に入ってみると前から後ろからも、右からも左からも、やぎが迫ってきました。私はリュックのひもにかみつかりました。

私は怖くて震えあがつて悲鳴を上げることもできませんでした。やぎは何匹もいて、何回も寄ってくるの

でよけいに怖かったです。

すごく暑くて倒れそうなときにアイスクリームを食べられました。暑かったけど、雨よりもやっぱり晴れてよかったです。

遠足

小学五年生 船山 聖奈

すごく
楽しみだった
遠足。

なのに
かさを使うことになつてしまつた
いつになつたら
やむのかな。
なんで雨なんか
ふるんだよ。
てるてるぼうず
つくつたのにー。

革細工▼▼▼

小学五年生 恩田依以子

革 革 革▼▼▼
三種類の革を▼▼▼
使って▼▼▼
組み合わせで▼▼▼
結んで▼▼▼
編んで▼▼▼
なやんで▼▼▼
なやんで▼▼▼
やっと思えた。



遠足の雨

小学五年生 戸田 莉紗

ふり続く雨
雨、雨、雨ー
永遠にふり続く
よりによって
こんな時に
いつになったら
やむのだろうー
やっと思っても
永遠にふり続く

ハンガリーの歴史

小学六年生 野際 佳奈

六年生は「ハンガリーの歴史・文化」について総合の時間に学んでいます。六月十六日は日本人学校の「小

学部の日」。ハンガリーの国立博物館に行ってきました。

博物館では、友達と二人で先生から渡された見学カードに書いてある問題を解きながら回りました。博物館にはお札にのっている人や、名前を聞いたことのある人の絵がいくつかありました。

この中で一番心に残っているのは、西ドイツと東ドイツに分かれていた頃のハンガリーの展示物があったところ。私は、この前の総合の時間に、そのころのビデオ（ヨーロッパピクニック計画）を見ました。そのビデオで見た「チラシ」や「鉄のカーテン」の本物がそこに展示されていたのです。思ったより私の知っているものが展示されていて、もっと詳しく知りたいと感じました。

文字は英語とハンガリー語ばかりでしたが、「Habsburg」という言葉を何度も見つけました。私はハプスブ

ルグ家にも興味があるので調べてみたいなと思いました。

私はハンガリーの歴史についてまだ知らないのですが、この一年間で少しでも詳しくなれたらいいと思っています。

ラヨシュミジェの思い出

中学一年生 堀川 智生

六月十五日、僕たち中学生は宿泊体験学習でラヨシュミジェへ行くことになった。

前日の荷物の用意は夜にやった。物がどこになるのか探し回って、物をリュックに詰め込むために、廊下を行ったり来たりすることがいやになって休んでいた。休んでいるときにラヨシュミジェが気になって、どんなところか考えてもみた。

当日、いよいよラヨシュミジェへ

行く日が来た。空は青くて日が暑いくらいだった。出発式を終えて、バスに乗った。バスはぴったり全員が乗れる大きさだった。バスがラヨシュミジェに向かって三十分、お菓子を食べてもよくなったので、ほとんど食べてしまった。

ラヨシュミジェは思った通りの田舎で、牛やロバや馬が見えた。草を食べたり、歩き回ったりしている。ペンションの人にあいさつをしたあと、男子の方のペンションに行った。

中は七部屋に分かれていた。荷物を置いて夕食を食べに行った。昼食はグヤーシュみたいでそうではないようなものが出た。とてもおいしかった。自由時間はプールに入った。プールは冷たくて深かった。少し泳いでも冷たい水には慣れないので、冷たいまま遊んだ。温かくなってきたときに、友達により冷たい水を掛けられて、また一層寒くなり遊べなく

なった。

自由時間が終わって次は乗馬体験なので、馬小屋に行った。馬は自分が今まで想像していたより大きくて、ついでに怖くて、最初に馬に乗る人たちが心配になった。二組目になるにつれて乗りたくなってきた。馬に乗ろうとしたが馬が大きすぎて鎧に足が届かなかった。最初は馬が歩くたびに揺れて怖かった。

前に先生が言っていた。馬は人の気持ちに分かるらしいから、乗る人が怖いと思っていると、あまり揺れないようにしてくれる馬と意地悪で揺れを激しくする馬がいるらしい。僕は小声で「あんまり揺らさないで。」と言っていた。しばらくすると揺れも怖くなくなってきた。ラヨシュミジェの大平原を横から突っ切った。風が吹いて気持ちよかった。グヤーシュ作りになった。始めに野菜の皮をむいたり切ったりした。

野菜が残り少なくなってきたら次は肉だ。肉は筋がかたくて簡単には切れない。しかし自分の包丁は他の人のものより切れ味がよく、肉を素早く切ることができた。野菜や固い肉を全部切り終わったら、大きな鍋に入れて、グヤーシュにした。グヤーシュはその日の僕たちに夕食になった。肉が多くて固かったが自分たちで作ったものは美味しかった。

二日目は馬小屋を掃除した。わらや馬糞を移動させ、荷車を運んでいった。次に馬の毛並みをそろえたり、体についている虫を落とした。馬は気持ちよさそうにしていた。そのあととは馬車に乗せてもらった。馬車を引く馬はさつき毛並みをそろえてあげた二頭だった。走っているときに、この大平原のきれいな花畑が見えた。走り続けて一時間ぐらいたったろうか、もう少し乗っていたかったが終了した。

学校に戻って解散式をした。ラヨシュミジェはとても楽しかった。動物や大自然と触れ合えた。これでも忘れられない思い出ができた。

貴重な体験

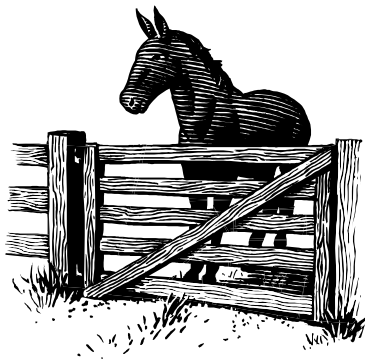
中学三年生 八代 大成

修学旅行。体験したことのある人もない人も不思議な魅力を感じるだろう。しかし、僕たちの行った宿泊体験学習は少し違っていった。

馬の世話、馬小屋の掃除、野外炊飯など、全身をフルに使って体験した。最初から決められた日程通りに動き、全員が全員同じものを見て同じように感動する修学旅行に対し、自分たちでルールや役割を決め、時間にあまり縛られず、自分たちで考え行動するこの体験学習。良い意味での自由や開放感があった。日本の

中学ではこのような体験は難しいが、この学校だからこそそれができる。そう考えるとこの二日間は本当に貴重な体験だったと思う。この体験は僕のこれからにとって確実にプラスになるだろう。

太陽の下、大自然の中で遊び、学び、汗をかき体験をする。単純で当たり前なことかもしれないが、今回の宿泊体験で改めてその大切さや必要性を実感できた。また、このメンバーで宿泊体験学習ができたことがよかった。これは心からの本当の言葉である。



みどりの丘日本語補習校

運営委員会よりご挨拶

運営委員長 鈴木 史明

皆様に支えられ、みどりの丘日本語補習校はこの四月で無事、二年目を迎えることができました。日本商工会、日本人会、日本人学校の皆様をはじめ、大変多くの方々に支えられ今日を迎えられました事、あらためて感謝申し上げます。

補習校にとって、昨年度は様々な成果、課題が確認できた一年でした。一番の成果は、何といても子供達が皆、みどりの丘補習校の授業を楽しみにしている事です。毎週土曜日の教室、廊下にはいつも子供たちの笑い声が元気一杯に溢れています。正直に申し上げれば、調子に乗りすぎて授業に支障を来たす事も無い訳ではありませんが、まずは「好きこ

そモノの上手なれ」です。これからも子供たちが心待ちにするような学校運営を第一に心がけて行きたいと思っております。

補習校では様々な家庭環境の子供たちが国語を学んでいます。両親が日本人の子、日本人とハンガリー人の両方を親に持つ子、両親ともにハンガリー人の子、日本に住んだ経験の在る子、無い子、と通常の学校では考えられない多様性を持っています。多様性の中で学習する事自体が、子供たちにとって大きな財産になってくれると思いますが、やはりこの多様性がそのまま日本語能力の差として現れていることも事実です。どの子の目線にあわせて授業を行うべきなのか、思い悩んだ一年でありました。就学環境によっては日本語を忘れていく一方の子供たちもいる中、如何に授業の質を保っていけるか、この点は現在も大きな宿題として残っています。

補習校は、地域の方々の声に耳を傾けながら、主に保護者からなる運営委員会が中心となって運営されています。補習校という、日本人学校から独立した形で国語教育を提供していくことが、子供たちにとってベストであるかは疑問です。しかし、現在は他にこのような機会を提供する場が無いのが現実です。ハンガリーに根を生やし、国語教育を必要とされる子供達のための学校として何とか将来も存続していければと考えております。このためにまず一番に頑張らなければならないのは、保護者の皆さんです。宿題等、ご家庭でのご指導お願いいたします。

私自身、昨年九月のハンガリー赴任以来、保護者の立場で関わって参りましたが、今年度より運営委員長として学校運営に携わることになりました。今後ともこれまで通りのご指導ご鞭撻の程、お願いいたします。

一学期の報告

1年1組担当 中野 明日香

「Beszél magyarul? (ハンガリー語、話せる?)」

「えっ? 日本語で言って? 先生はハンガリー語分らないよ」

このクラスがスタートした日のあの男の子との会話です。

(先生にはハンガリー語が通じないんだ。じゃあ、ここでは何とかして日本語で話さないといけないんだ) と思って欲しいとそう答えました。すると、

「そんなことないはず! ハンガリーにいてハンガリー語が話せないなんて。じゃあ、ぼくが先生にハンガリー語を教えてあげる!」

思わず笑ってしまいました、

「授業中は日本語で!」

と今でも口をすっぱくして言っている

ます。それも、このクラスの三人は普段の生活で日本語をほとんど使わないこともあり、ハンガリー語の方が断然、語彙が多く自分の意思がきちんと伝わることから彼らにとって「楽」な言語です。しかし、ここは補習校。日本語で国語を学習する場です。難しいな、面倒だな、と思うてもその事を理解して積極的に日本語に関わって欲しいのですが残念ながら、ひとりがハンガリー語で話し始めると一気にハンガリー語が溢れ出してしまうのが今の現状です。



1年2組担当 宮城 幸恵

新一年生は、女の子二名で始めました。入学式の緊張と不安は、その日の内に消え去り、出だしの授業からやる気満々の二人。準備してきた息抜きのための副教材は使わずじまい。配られた教科書が嬉しく、「この本は何時使うの?」「お勉強楽しいよねえ!」と目がきらきら輝いていました。一年生なので、まずは授業に取り組む態度から、集中力が続かないので途中に息抜きを入れながら、と考えていた私ですが、トンでもない誤算です。

教科書の内容も見見る飲み込み、短い授業時間に一学期の目標を達成してしまいました。十日間という短い授業日数でしたが、その間にとっても仲良しになった二人は、学校で一緒に会えることが楽しみで仕方ない様子。休み時間は、二人でかくれんぼしたり、絵を書いたり、ぺちや

くちやおしゃべりしたりと二人の世界。チラッと目配せしながら、かわいいなあ……と目を細めている私です。

かわいい女の子二人が気になるのか、他のクラスの男の子がちょっかいを出しに来ている人気の新一年生クラスですが、残念ながら一学期までクラスは閉じられます。ご家庭での学習に協力してくださった保護者の方々には心から感謝しております。また、それぞれのクラスがまとまり、勉強しやすい環境を、と様々な策を練って下さった運営委員会の皆様、私にとって皆様が信頼してくださり、見守ってくださったことが、大きな支えとなりました。大変貴重な経験をさせていただいたと感じております。本当にありがとうございます。

2年生担当 フルディ・満名実

新しく、みどりの丘補習校で教鞭をとり始めて、はや三ヶ月：週一回の授業に備える一週間があんなに長かったのに、今振り返ってみると、この三ヶ月がほんの数日のように思えてしまうほどの慌しさ。こうして人は時間をも支配できるのか（それた？）と、新たな楽しみを見つけたことができた一学期となりました。二年生は男子ばかりの四人組。男の子ならではのユニークな発想と元気さとに満ち溢れた、明るいクラスです。今学期は、そのパワーを国語の勉強に向かわせることからスタートさせました。

普段国語を学ぶ環境にいない生徒たちにとって、この補習校での三（四）時間はとても貴重な勉強の時。それをいかに集中して取り組ませるか、が大きな課題のひとつとなりました。

ハンガリーに来たそもそものきっかけは、ピアノの勉強と指導法のための留学でした。そんな私は、日本では、大学在学中は学習塾で高中生に国語と英語を、卒業後は中学校で音楽と、一年生に国語を教え、その後は某音楽教室での教育システムに基づき、一歳半から六十代の方々にピアノを教え……と、ずっと教育に携わってきました。その経験から、やる気と力の向上は、まさに先生との信頼関係に大きく左右されると考えています。



4・5年生担当 知念 まり

毎日が慌しく過ぎていく中で、土曜日のこの時間は私にとって心休まる場であるのだが、子どもたちにとってはどうなのだろうと、ふと思った。毎日学校に通い、習い事をたくさんし、大量の宿題もこなし、土曜日も学校（彼らにとっては習い事という認識だろうか）に行き、そしてそこでもまた多くの宿題が渡される。うーん、この子どもたちはいつ遊ぶのかな、と宿題を大量に出している張本人が心配してしまう。「じゃあ宿題を減らそうか?」「いやそんなことをしたら彼らのためにならない」「でも彼らのためって何なの? 何が彼らのためなの?」という自問自答を繰り返して今日に至るわけであります。あー教育って難しい。「ところでその教育ってそもそも何なのよ」とまたまた抜け出せないぐるぐる回るハムスターの車輪に入った気分になってしま

うのでした。

こんな時、ありがちなのは自分自身の子供時代を思い出し、その時の環境や受けていた教育と比較してみるのですが、例に漏れず私もやってみました。思い起こせば私自身かなり忙しい子どもで、クラブ活動にお稽古事、宿題や家事の手伝い、時には年の離れた妹を遠くの保育園まで迎えに行くなんてことまでやっており、あの頃から忙しい毎日を送っていたのではないかなあ、という思いに行き当たります。

褒める、認めるということはある以上は難しく、「頑張ったね。すごいね。上手だね。よくできたじゃない。」以外の言葉がなかなか出てこないことに苛立ったり、時間に追われてついつい蔑ろになってしまったり、この一見非常に簡単そうなことを行うのに四苦八苦している今日このごろです。でも何のことはない。もう一度基本に戻って一人一人とじ

っくり向き合ってみれば、そんな言葉はすんなり心の中から出てくるのでしょーうね。あまり構えず、素直に思ったことを伝えてあげることが一番大切なことなのかもしれせん。

この四月から四・五年生の複式クラスを担当していますが、これが想像以上に難しかった。去年一年間で既にそれぞれのクラスの雰囲気がつかり固まっております、しかもこれが正反対。一学期は休みが多かったこともあり、二つが溶け込むのに結構な時間がかかってしまいました。落着かない授業が続いたり、なかなか集中できない環境だったり・・・。私自身、二つのクラスを同時進行させなければならぬという試練の日々でもありました。何とかやりとおせたのは、我慢強くなった子どもたちのお陰かな。クラスみんなに感謝、感謝です。

第五話 「もったいねエ」

岩井孝博

インチキ・チン
インチキ・チン
インチキ・チン
インチキ・チン
インチキ・チン
どうも、このオ、世の中には、無い
よう有るのが、嘘。
有るようで無いのがお金、ということ
になってます。
嘘か本とかわからないようなことも
よくあります。
夏になって、日本中どこへ行
っても蒸し暑い。
長屋住まいのグミ助、東京生まれ
で、田舎がない。
クーラーもない。
そんな事をチョコ坊に愚痴ります

と、チョコ坊の二つ返事で、長野県
の田舎のに二人で行く事になりました。
た。
昔ッから、軽井沢とか清里なんて
所は有名ですが、一人が行ったのは、
大深山。
夏は高原野菜の収穫期。
平地も山肌も、もう見渡す限りレ
タスの畑。
一〇センチくらいに育った苗を畑
に植え付けますと、黒かった畑が日
ごとに、緑に染まっていくのを見て
ますと、ああ見事なもんです。
チョコ坊とグミ助が大深山に着い
たのは、畑仕事が一段落ついた午後。
手作りおハギでお茶時間。
「よう、知ってるけ、隣村の権兵
衛さん」とチョコ坊の親父さんが身
を乗り出した。
「ああ知ってる、大分貯めて、久
作ンとこの畑買ったってこったな、
たいしたもんだ」と手伝いの善助が
手放して感心する。

「その貯め方だ、たいしたもんだ
も、あすこまで行くと、呆れるな」
と親父がいまいましそうに言って、
グッとお茶を飲む。
善助が沢庵をガリツと噛んで、呆
れるって、何が、と聞く。
「そうじゃねエか、せっかく沸か
した湯だからって、風呂に入って首
も出さねエってよ。屁こくにもな、
畑の風上でやって、
肥やしにするって言いやがる」
聞いてた善助が、風のない日にヤ、
どうすんだ、なんて茶化す。
「そんな時や、おめエ、畑ン中でや
るって話した」
「親父、そりや、野糞だ」と善助
がまた茶化す。
二人の話に乗ってチョコ坊が一言
「貧乏人のヒガミって、ヤアね」
なんて言ったもんですから親父が
「おいチョコ、誰の事言ってるんだ」
と怒った。
「目くじら立てる事、ないじゃな

い」シヤラつとチヨコ坊。

「おりやな、そうまでして、金金
って言うのが嫌なんだ」

「何カッコウ付けてんの、うちが
離婚する時、金うんとふんだくれ、
なんて言ったの、どこの誰よ」なん
て言ったもんだから、親父が湯飲み
を投げるように置くと

「あ、眠い、昼寝だ」いうなりさ
つさと立って行きます。

入れ替わって祖母さんが現れ、チ
ヨコ坊に耳打ちをする。

聞いたチヨコ坊、祖母さんの顔を
しみじみ眺め、じゃ、帰れって言う
事かと、囁いた。

こつくりうなずく祖母さん。

そんなこんなで、三十分もしない
内に、親子でヘソを曲げ、チヨコ坊
はグミ助を顎でシヤクツてさつさと
歩き出した。

「グミ、何オタオタ振り向きなが
ら歩いてんの」

「あ、あの、おハギ：」

ああ、もったいねエ

朝、東京を発って夕方には又戻っ
てきたんですから、楽しいはずもな
く、帰り道、チヨコ坊はプリプリ怒
りっぱなし。

グミ助はおハギに未練たっぷり、
ああ、もったいねエ。

「ねエ、ガムちゃん、帰ってくる
頃じゃないかい」

「夏って言ってたが、何日とは言
ってなかったな、どうすんだい、こ
れから今日」

「帰るわよ、家に」

「ん、俺、乾きが良いから、障子
張りでもやるか」

チヨコ坊と別れ、グミ助もボロ長
屋に帰ってきて、なんだかよく分か
らん日だったとか何とか、ブツブツ
言いながら、障子張りを始めます。

流れ板、職場なければ、只の馬鹿。

着流し流れ板のガム公、ヨーロッ
パを切り上げ、日本に帰って来たの
が宵の口。

「よう、グミ助、元気かい」

「今、手エー離せねエー、後にし
てくれ」

破れ長屋の自宅で、障子の張替え
をしていたグミ助の背でいきなり声
がしたんですが、まさかにガム公だ
とは気が着かない。

あのオ障子の張り方ってものは、
なかなか難しい。

「グミ助、障子ってなア下から張
るもんだ」

「どっから張ったって：」

言って、シヨイとグミ助が振り向
きます。

「あ、あ、ああ兄ィー」

戸が菱形になって開いてる玄関に
立ってガム公が、

「何ポカンとしてる、チャーンと、
足あるだろ」

「ん、お化けじゃないな、何時来
たンだい」なんて、グミ助も悪乗り
で言います。

「障子ってなア、上から張ると、

継ぎ目が上向く、そこに埃が溜んだよ」

「ああ、成る程な、何時来たんだい」

「おメーの前に、今だ」なんて、ガム公がおどけます。

「日本にさ」とムキンなって聞くグミ助。

「さっきだ」言いながらガム公が入って、十年か早エーな、と懐かしそうに見渡す。

「ああ、兄イーがエグレスへ行つて、もうそんななんだ」と溜息混じりのグミ助。

そのグミ助を心配そうにガム公が

「今、何やってる」

「旅行から帰ってから、考えてよ。

兄イーの真似事やってる」

「何イ、板前にか」

「プーたろやってると飯追っかけないかんが、これやってると、飯が追っかけてくる」とグミ助がしんみりと言うと、

「ちげエーねエ、もう五年かい、どんな素人でも、真面目にやってりや、プロだ」とどっかクスツとしながらのガム公。

「でもよオ、やればやるほど、料理ってな、オツカネエな」

なんてグミ助が言うのと、それが分かれば、いい華板に成れるぞとガム公が励ます。

「なあ、アニイ、チョコ坊は知ってんのかい、来たって事」

「まだだ」

「ナアんだ、水くせえな」

「バカ、成田に降り立って、さて、どっちに行こうかってチラシの紙飛行機飛ばして、先のむいた方について

来たら、ここだった。三畳一間でもいいから、落ち着き先が決まったら、と思つてよ」

「ちよつと待ってくれ、俺、チョコ坊に電話してくる」

一人残ったガム公を、障子の張替え中とはいえ、どっかから、ペンキ

の匂が包みます。

見れば玩具のような家具の剥げた所に、塗った後がある。

部屋の隅に積んである本を見ると「魯山人」だ、「料理の起源」だなんて、結構勉強してるグミ助が見え、ジーンと嬉しくなってきました。

ガタ、ピシと戸の開く音がして、グミ助が戻ってきました。

「どこまで行つた」

「大家の電話と思つたが、ちよいと具合悪りイんで、通りまで、じき来るよ、チョコ坊」

「どうしてるチョコ坊」となんとなく照れくさそうに聞くガム公。

「知つてんだろ、クリーニング屋の若旦那、散々口説いておいて、跡継ぎが、四・五年経つてもその兆しがねエもんだから、出て行けだ。ったく」

「ああ、あいつか、女を子作りの道具と思つてやがったか」

ガタツと表で音がしたと思うと、

張りかけの障子を蹴飛ばしてチョコ坊が入ってきた。

ペタンと尻餅正座で、ガム公の前に滑り込む。

表で大家の声もする。

「おい、グミ助居るか」

「あ、大家さん、どうぞ」

「どうぞじゃね、さつき表で見かけたが、さつさとどっかに行きやがって、家賃どうした」

言われて、そそくさと立って表に出るグミ助。

「給料日、あさってなんだ、すぐ払うから待ってくれよ」

「なんだ、昨日じゃないのか、又仕事、変わったな」

「そ、そうなんだ」

事情が分かれば、大家も人の子、無理を言わずに帰った。

「グミ助、なんだ今の話」とガム公が刺す。

ガム公に聞かれ、しかじかと話すグミ助。

「よく気が着いたなグミ助、正しいよ、お前エが」

この話し、聞いてたチョコ坊

「何よそれ、油汚れに洗剤使うのが普通で、汚れ落とすのに油を使うって、どういう事よ」

グッとグミ助が身を乗り出して言う。

「ホラ、よくさ、空き瓶がもったいねエって洗って使うだろ、水に漬けて取れるラベルはいいがな、糊が取れねエやつがある。この糊に食油を付け、糊を溶かしてから洗剤使うと綺麗に糊が取れるんだ」

「それがどうして店を辞める事になるわけよ」とよく分からないチョコ坊。

「汚れ落とすのに、油使うのが理屈に合わねエって言う奴が居て、店がそいつの肩を持った」悔し涙に口一文字のグミ助。

「何よ、それで馬鹿だのアホだのって店辞めたの」グミ助の両肩に手

を置くチョコ坊。

「どんな奴だ」

こんな背丈で、こんな顔、グミ助が言ってる最中に

「そいつア下町だ。ポン中アル中、素面の時は借りてきた猫だが、酒飲むと途端に大トラだ、死ぬの殺すのってあたり構わず暴れまくる。今頃店じゃ後悔してるよ。放っておけ」

ガム公、手にしたコップ酒をそっと置き

「いいじゃねエか、手めエの物差しでしか計れねエ奴なんか、墓穴の花道まっしぐらだ、見てれば分かる」

「知ってるの、その下町って人」と小首をかしげるチョコ坊。

「ああ、忘れんのが、もったいねエぐれエ知ってるさ」言って苦みばしった流れ板ガム公。

アラ・ドツコイ。さてと一服。

――終わり

第一回ソフトボール大会

大会実行委員長 守谷 幸治

さる五月七日、ハンガリー日本人会二〇〇六年第一回ソフトボール大会が開催されました。今回は、なんとウィーンから参加の申し出があり、国際色を感じた反面、チーム数が増えたことにより従来のトーナメント方法では問題が生じるため、ちよつとしたプランの変更を行いました。これにより、全一四チームが最低二試合を戦えることが可能なまま、大会が運営出来るよう計画できました（この結果、昼休みが非常に短くなったチームの皆様には、お詫び申し上げます）。

チーム名に關してもいつもはシンブルに社名だけだったものが、今回は、ミラクルズ、Night Patrols、勝好会（商工会C）など、色々とユニークな名前での申し込みがあり、皆

様の例年以上の興味とやる気をひしひしと感じました。

さてフェニックスチーム（ウィーン遠征チーム）が、早朝ウィーンを出発すると言うことで、運営本部としてはいつものように雨での延期は絶対に避けたいところでした。早朝六時時点で現地はかなり雨が降っていました。が、垣間見える青空に期待して半ば強引に開催決定としました。

ああ、こんなにお天気が気になったのは何年振りでしょうか。建築屋が、日本の高層建築における床コンクリート打設日の朝、降雨のないことをひたすら祈り続けるあの緊張感を今回久しぶりに味わったような気がします。（ちなみにハンガリーの建築では、平屋建築が多く、床コンクリートは屋根取付後の施工となるため、雨を気にする必要が全くありません。：蛇足。）結果的にこのジャッジは正解で、その後雨はあがり、

昼過ぎにもう一度降っただけ。全試合を予定通り行うことができました。

ウィーンチームの参加以上に今大会の大きな注目は「商工会Bチームの4連覇達成なるかどうか」というところにあります。毎回無類の強さを見せ、今回も優勝候補の筆頭であった商工会Bチームは、初戦で強豪サンヨーチームと対戦しました。

今回のサンヨーチームは、エアコンのようにクールに自らを謙遜しつつ、実はソーラーパワーを源とする力強さを隠し持つ有力チーム。試合は予想通り白熱した展開となり、がつぱり四つのまま最後の最後まで一チームの勝利、商工会Bチームの4連覇への夢ははかなくも破れたのでした。

サンヨーチームはその後も快進撃を続け、準々決勝対伊藤忠戦（9対8）、準決勝対PPM Killers戦（13対11）といずれも接戦を勝ち抜き、

決勝対アルパインチーム戦では、大会史上初の延長戦に突入、最後は延長表に上げた決勝点を皆さんで守り抜き、10対9で念願の優勝を勝ち取りました。球史に残る壮絶な（決して大げさではなく）試合だったと思います。両チームの皆様、本当にお疲れ様でした。

なお、今大会はなぜかホームランが少ないのも特徴でした。通常7、8本が当確ラインといわれる最多ホームラン賞については、アルパイン小松さんが4本で獲得という結果になりました。しかしながら、一試合最高得点は20点ということなので、決して投手が良くなったという傾向でもないようです

フェニックスチームは、というと見事に大会1勝をあげ、ベスト8進出を果たし、ソフトボールの醍醐味とブダペストのさわやかなそよ風を楽しんでいた様で、充実した笑顔で帰途につかれました。

今大会の結果は次の通りです。

優勝 三洋電機

準優勝 アルパイン

第三位 PPM Killers (デンソーA)

最優秀選手賞 勝部 浩司さん

(三洋チーム)

優秀選手賞 前川 昌一さん

(アルパイン)

最多ホームラン賞 小松 規孝さん

(アルパイン)

今回は、初めて大会実行委員長をさせていただき貴重な体験をすることが出来ました。ありがとうございました。また、今回のソフトボール大会への皆様のご参加、ご支援、ご協力に改めて感謝いたします。どうもありがとうございます。秋の大会もぜひ万難を排してご参加ください。



「ドナウ通信第 68 号」（2006 年夏季号）

発行者 ハンガリー日本人会

発行年月日 2006 年 7 月 15 日

発行代表者 伊藤 和矢

編集責任者 盛田 常夫

表紙デザイン さくらデザイン (Inner Design Bt.)

1021 Budapest, Bogár utca 7

写真・裏表紙デザイン Kármán Studio Bt.

日本人会事務局 連絡先

Magyarországi Japánok Szervezete

TEL/FAX: +(36-1)373-0400

1054 Budapest, Zoltán u.13

P.O.Box: 638 H-1365

E-mail: nihonjinkai@nihonjinkai.hu

ドナウ通信編集部

TEL/FAX: +(36-1)361-4469

E-mail: morita@tateyamahu